

## A-1. 算数科における授業改善の方向性

「算数は難しい!」「考えてもよくわからん!」「意味わからん!頭の中がごちゃごちゃしてきた!」という言葉をよく耳にする。計算問題など、パターン化された問題に対しては意欲もあり理解もできるが、思考を要する問題になったとたんに、意欲が減退し理解できなくなってしまう。また、「答えは出たけどわけがない」という言葉もよく耳にする。正解することが目的となってしまう、何となくわり算したり、かけ算して答がでてくればわかったつもりになってしまう。よく聞くとそれなりのわけがあつて考えているが、直感が強いので、学び合いの場でわけを説明するまでには至らないことも多い。

そんな子ども達から、算数の学習が「楽しかった!」「もう一時間続けたい!」と思わず声がでるのは、自分の力で困難な問題を解決し「わかった!」になったり、みんなで考えて「もう少しではっきりできそう!」と感じたり、知恵を出し合つて「なるほど!」と納得した時である。

もし、児童に「なぜ? どうして?」という課題追求意識を持たせ、それを仲間と学び合い、「なるほど! わかった!」になる学習を連続させることができれば、考える楽しさを味わうことができ、「算数って楽しい!」と感じてくれるのではないだろうか。そして、その学習過程にある「納得」は、基礎・基本の定着にもつながり、新たな課題を考える基盤となって、さらに算数を学ぶ楽しさにつながっていくのではないだろうか。

このように考え、5年生の「小数のかけ算・わり算」の単元を通して、実践してみることにした。この単元は、かけ算で学習したことがわり算の既習となり、わり算で学習したことが、倍関係を考える既習となる。さらに、この単元で学んだことが「小数をかける・小数でわる」学習の既習となるので、既習の大切さや既習を使って考える楽しさを感じさせることができると考えている。

